

交叉点24

明高24回生通信
25th/Aug./2007
No. 16

交叉点24に寄せて 「明高 nostalgia」

書写山 山麓 (翁) 東道

梅雨あけと同時に、二十四節季の「大暑」、暦の上では、暑さも盛りの時期、「兔も耳垂るる大暑かな」と芥川龍之介は詠んでいる。

明高24回生の皆さん、お元気ですか。暑中お見舞い申あげます。健康に十分にご留意、ご自愛のうえ充実した日々をお過ごし下さい。この頃には「うなぎ」を食べても、ピヤガーデンで腰をおろして、冷えた生ビールを痛飲しても、この酷暑を乗り切るとは至難。ただひたすら「押暑坐忘」。

去る七月下旬過ぎ、夕食の一刻、ビールで暑さを凌いでいる最中、「電話です」のワイフの声で、並々と入っている泡立ちコップをうらめし気に見ながら、電話口に立ち、受話器を取った瞬間、「河合です」。あの甘い優しい相手を引き込んでしまうような声。微笑（ホホエミ）顔、思わず知らず、明高時代の話引きずり込まれ夢中になり、警戒心が緩んだ瞬間「交叉点24」の原稿依頼、「シマッタ、やられた」後のまつり。

「他の先生にお願いしたのですが…。ご都合が悪く…。」と最後の矢が私に突きささったようです。実は、私が河合君のベターハーフ、嘉美様の担任であったこと、お二人の結婚披露宴に故中村隆次先生と一緒に招待され、お祝いのスピーチをしたご縁もあり、河合君から何か頼まれると引き受けざるを得ない運命です。

更に、「先生からの原稿が届き次第、交叉点24発行が出来る段取り。お待ちしております」の追伸を頂戴し追い込まれてしまいました。ちょうど、司馬遼太郎の作品に心を奪われ、中国大連を訪れ、日露戦争跡の鶏頭山、二〇三高地、旅順港などの激戦跡、乃木大将、ステッセル將軍の会見場所、水師營跡を友人二人と訪れる計画があったり、他にもろもろの雑事に追われ「閑中忙」。その上に「ああ、われダンテの詩才なく、バイロン、ハイネの情熱なくて…」と青春時代に怒声をあげて歌っていたその通り。私自身非才、文才が全くない自分自身を嘆きながら、歳を取りました。原稿がおくれに遅れ、誠に申し訳なし。

私が姫路南から明高に赴任したのは昭和39年4月でした。播磨路から初めて姫路南が夏の甲子園大会に出場、三回戦で敗退、引続いて明高が県代表、甲子園球場を湧かせる大活躍。県兵庫高校野球華やかな余韻が残っていた頃でした。新任教師の時、最も薫陶を受け、私の結婚式に臨席まで頂いた姫路南校長が明高校長安田武先生（小野高校長に転任された後でした）であったご縁やら、その他にもいろいろのつながりがあ

りましたので、少し遠距離でしたが（JR姫路一明石約60分）姫路を後にしました。当時JR明石駅は木造部分が大部分残っていました。初めて明高を訪れた際の印象は40年以上年月を経た今でもはっきり脳裡に残っています。校舎前の大きな明高池？堤一面を取り巻くポプラの大樹。古木、大樹に囲まれた前庭、及び校門付近。校門に入った正面の小さなプールには、緋鯉が泳いでおりました。目を転ずれば、瀬戸の海、青い海原に浮かぶ淡路島、白波を立てて航行する小船の群、一幅の絵のような美しい環境。又、屋根屋根の上にそびえ出ている天文台、etc。走馬燈の絵のように脳裡をかけ廻ります。一方で指導いただいた学識の深い人間味溢れる恩師。互いに激励し助け合いながら学習指導にクラブ活動に汗した同僚の諸先生。それに加えて、明朗、快活、素晴らしい素質と人間性に溢れる明高生諸君たち。皆さんに教え、教えられ、共に学び学ばせてもらった日々。気がつけば12年の歳月。私には最も充実した黄金時代とも言えるべき教師生活でした。改めてご縁をいただいた恩師、先生方、生徒の皆さんに感謝の意を表します。

さて去る2月10日（土）明高20回生の同窓会に招待され、他の先生方10名と一緒に出席（2ヶ月後に再会を約した英語担当陶山昭先生の訃報）全体会が終わり、二次会に続いて…。夜更けに及ぶまで、最後に担任クラスの皆さんのお世話で、準備して下さっていたホテルの部屋に運び込まれました。翌朝、目覚めると白壁の明石城、緑したたる森、白鳥が浮かんでいる堀…。生徒の皆さんのご厚情に「教師冥利」の一言に盡きる思いの一泊二日の明石。歓談の席の中、卒業生の方々が一人一人歩んでこられた人生路で、あらゆる分野の責任ある立場で、指導者として、管理者として、又、オーナーとして、国内で外国でバリバリ活躍されている話を耳にして、やっぱり明高生、その底力と人間性の豊かさに敬意を覚えた次第。恐らくその源にある精神は、

- (1) …わが学舎は海にのぞむ、われらつねに世界ののぞむ（海外雄飛）
- (2) …わが学舎によき師よき友（人間の絆）
- (3) …われらつねに栄えあるものに（向上心、努力）
集え、競え、誓え

この明高校歌の中に濃縮されていると、私なりに解釈しているのです。どうでしょうか？

皆さんが、日々の生活の中で一度は必ず口ずさみ、努力し、奮い立ち、前進される糧に！！私も健康のた

めのサイクリング中、無意識の中、いつのまにか、ハミングしているのに気づき、驚きます。体中に浸み込んでしまっているのでしょうか

昭和 51 年 3 月明高を去り、郷里の新設校（生徒数 180 名）に転勤。この年から明石学区は総合選抜制に変わり、新設高校が次々に誕生。伝統と名門、明石高校も少しずつ変化の芽が出はじめて来たように考察しております。が、明高同窓生は、わが子、わが孫は必ず明高へ！！

さてある日、「翁」の文字が目に入り、日本語大辞典を開きました。「インドの思想、林住期、第二の青春時代、人生の収穫の秋を指す。」と説明がありました。後日、本年 2 月下旬に偶然に五木寛之著「林住期」の第一版が発行されたことを知り、早速購入しました。人生百年と考え、これを四つに分けてみる古代印度の四住期という考え方。

「学生期」25 歳頃まで、心身をきたえ、学習し、体験をつむ、(青春)

「家住期」50 歳を過ぎる頃まで、社会人の時期、就職し、結婚し、家庭をつくり、子供を育てる年代(朱夏)

「林住期」75 歳頃まで、プラス 10 歳して 85 歳頃まで、真の人生のクライマックス、自分の人生の黄金期として開花させよう計画し、夢見、実現しようとする時期(白秋)

「遊行期」死をみつめ、自分に正直に、前向きに、力を抜いて楽しむ、前向きな余生、(玄冬)

さて、24 回生の皆さんは「家住期」がほぼ終わり、「林住期」の入口に立っておられます。(人生の「臨終期」のように考えることはやめよ、五木寛之) 今まで歩んでこられた自分自身の人生に、信念と自信、実感と喜び、子供の養育を完了した責任の満足感を堅持しつつ、林住期を力強く前進して行って下さい。肉体的な衰えを傍らにして、一步一步踏みしめながら、進みはじめた時こそが、真の人生の収穫期となるでしょう。お一人お一人の前途に拍手を送り、今後のご健勝、ご多幸、更なるご活躍を願います。そして 24 回生の友との輪を広げ、互いにしっかりと手を握り合い、明高校歌を口ずさみながら前向きに！！

最後に「人は生まれてくるときは丸裸で、人の手に受けとめられてこの世にやってくる。人はだれかに支えられて育つ。人は助け合って生きる。人は死に向かって生きている。だから今できることを。ありのまま、その日まで生きぬくことが…。」

「遊行期」の私の心境です。拙文と遅れましたことをお詫びしつつ、24 回生の同窓会でお会いできることを夢みながら。再見

「おばさんのひとりごと」

3-8 山口(奥田)敦子

ご無沙汰しております。明高を卒業して何年になるのでしょうか？ 同窓会に一度も出席できず、すっかり存在すら忘れられてしまったのではないのでしょうか？

生まれも育ちも明石、姉姉とも小学校から高校まで同じ学校でどこに行っても顔見知り会い、近所のおばさん達が井戸端会議をしている横を通るのが嫌で挨拶もそこそこに、早足で通り過ぎた帰り道。あー、誰も知らない所へ引越したい、といつも思っていた。その夢？がかない、結婚して今の家が十軒目である。でもやっぱり明石に帰るとほっとする。子供たちは転校が多く、ある意味苦勞も多かったと思うが、各地での思い出は私の宝物であるし、彼女たちにとってもそうあって欲しいと思う。

1991 年に横浜から NY 州のロングアイランド、ポートワシントンに渡った。そこは、全米屈指の高級住宅街サンズポイントの隣で、海に沈む夕日がとてもきれいなのかな町であった。築 60 年の古い家だったが、木々が多く植えられている庭にはリスが遊び、青い鳥のブルーージェイ、真っ赤なカーディナル等が飛んで来た。夏の早朝、土から出てきたばかりのせみがゆっくり慎重に殻からでて薄緑色の羽をのびしていたり、夕暮れには、螢が小さな光をふりまいていた。日本では見ることができないすばらしい自然の美しさが目の前にあった。子供達は、異なった環境で言葉もわからなかったにもかかわらず、逞しく生活になれていった。瞬く間に言葉は私を追い越し、ほめられる教育の中で自信を持ちのびのびと成長していった。そして、私は子供が学校に行っている間にマンハッタンへ。地下鉄を乗り継ぎ、美術館、ショッピングヘクワクシながらでかけた。ミュージカルにコンサート、好奇心は膨らんでいったが、8 ヶ月で西海岸への移動となった。後ろ髪をひかれる思いであったが、カリフォルニアは天国だった。冬は暖かく、夏は涼しい、日本食は豊富にあるし、テニスコート、プールは使い放題。道路は広く、遊園地は最高！こんなにノーテンキに暮らしていてよいのだろうかと思うほど毎日楽しんでた。4 年があつという間に過ぎ帰国。思春期だった子供達は、カルチャーショックもあり、学校、生活習慣いろいろな場面で戸惑い、傷つき、悩んでいたと思うが、それを理解してやれずに親子バトルもたびたび、出口が見えず悶々とした日々が続いたが、今では、そんなこともあったよね、と言えるようになった。私が何も知らず天国のように思っていたアメリカもさまざまな問題を抱えていただろうし、悲惨な事件も起こっていたにもかかわらず、たまたま事件にも事故にもまきこまれず、よい思い出だけが残ったのはラッキーだったと思う。少なくとも私が個人的に接してきた多くの人々は困っていると優しく手を差し伸べてくれ、いろいろな場面で助けてくれた。12 年が瞬く間に過ぎ、今は千葉県の市川市に住んでいる。目の前の江戸川を渡ると東京。ここが最後の住処になるのだろうか、ペランダからは高層のビル郡、東京タワー、そして富士山が望める。みんながんばって生活しているのだろうか

あ。思い返せば多くの失敗をしてきたけれど、今生かされていることに感謝。これからの人生、今までも今も支えてくれていた家族、そして周りの人々、自然にも、私なりにできる事を、感謝をもって精一杯していこうと思う。たとえそれが小さなことでも積み重ねていけば大きく広がっていくかもしれない！？

おばさんの独り言でした。

「旅に出て 32 年、否もう 54 年か」

3-1 市原寛之

ほとんどの方にご無沙汰いたしております。1-6、2-2、3-1 の市原です。中学は望海、現在大阪・高槻市に住んでいます。

明高卒業後は大阪の私大で 5 年を過ごし（ご存知の通り、大不況の中、職が決まらず「新卒」の肩書欲しさに留年しました）、5 年目の 2 月に小さな旅行会社へもぐりこみました。そして昨年、会社は寿命の 30 年で同系会社と合併しましたが、おかげさまでそのまま 32 年目を勤めています。

思い起こせば、大学受験で必死な筈の高 3 に数人の仲間と旅行サークル「風と土」を立ち上げました。ご存知の方は少ないでしょうが、一応文化祭にも出店しました。前年に開幕した大阪万博、国鉄の個人旅行キャンペーン「ディスカバージャパン」のスタート、テレビでは「遠くへ行きたい」の放映開始と、いわゆる旅行ブームでした。サークルは 10 名に満たない小さなグループで、我々の卒業後は雲散霧消しましたが、最大の功績はその中から 1 組の夫婦が生まれたことです。そして私にとっては、進路決定の一つの方向を与えてくれたことが成果だったと思います。

就職した頃はいわゆるツアー全盛時で、バス旅行を中心に、観光のみならず、登山やスキー、霊場巡拝など団体旅行が拡大を続けておりました。私も就職 1 年目は、合計 123 日も添乗で出かけ、その準備と帰ってからの精算を除くと、あとは眠るための休みといった毎日でしたが、見るもの出会うものがすべてとっていいほど初めての事ばかり。自分ではとても行けない、いや行かないところまで経験できたのは大きな財産でした。飛行機に乗るのももちろん初めて、添乗業務で緊張している上にシートベルトの使い方が分からず、お客さんに気づかれぬよう浴衣の紐のように締めて上からコートで隠していた…という先輩の笑話が、さて自分の番になると笑っている場合ではなくなる訳です。初めのうちは余裕などどこにもなく、観光地の目印を探すのと、トイレの場所を確認するのに必死の毎日でした。

また当時、団体旅行で泊まる宿は相部屋が当たり前。誰と誰、どの夫婦とどの夫婦とを一緒にするかを旅館到着までに決めなければなりません。先輩からは「まず名前を覚え、休憩ごとに名前を呼んで話しかけてどんな人か探れ」などと教えられましたが、何しろバス 1 台には 40 名～50 名のお客様が居られ、1 泊 2 日の

旅が終わる頃にやっと、何とか全員の名前を覚えられたかどうかという状態でした。

それでも人間は名前と呼ばれると何となく嬉しいもの、自然と打ち解けるのも早くなります。ツアー出発からしばらくは「添乗さん」と呼ばれていても、宿に着く頃に「市原さん」と呼ばれると大変嬉しかったものです。

さて、当時の旅行事情はというと、交通網の整備も現代と比べると雲泥の差で、主な高速道路といえば名神・東名くらいでした。航空便や新幹線も路線・便数・席数ともまだまだというところでしたから、旅もノンビリしたものです。宿泊施設も洗練にほど遠い状況でしたが、「温泉」と「上げ膳据え膳」があればそれで十分楽しみ、癒されたものだったように思います。極端な言い方をすれば「旅行に行けた、それだけでありがたい」と思う方が大半だったように思えるのです。

当然ながら現代の観光旅行は、より便利に、より早く、より快適に、そしてより安く…となってきました。旅はいい意味でも悪い意味でも“非日常”ではなくなってきた訳です。その反面、秘境は消え、きれいな水は消え、ヒトにも心の余裕や思いやりが消えつつあるように思います。



暮らしやモノが豊かになり、インターネットを初めとするバーチャルな世界が広がれば広がるほど、楽しみ方のバリエーションは増えていきます。しかし、人と出会って話しをし、現地を訪ねてその風と土に触れることの大切さ・楽しさは逆に増していくはずで

“旅行会社は電話 1 本・机一つ（現代はそれに加えてパソコン 1 台）でできる簡単な商売”と揶揄されてきましたが、それも一面の真理です。飛行機の席を頒けてもらい、バスを運転してもらい、食事を作ってもらった上に泊めてもらう。温泉でゆったりし、美しい自然の風景や素敵な美術品に触れ、お客様には「ありがとう」と言ってもらえる。自らは何も持たず、他人のふんどしで相撲をとっていながら（表現が古臭くて失礼）お礼までしていただけるのですから、こんないい商売はありません（もちろんその前提には「平和」であることが必要ですが…）。両手を使えば数えられるようになった残りのサラリーマン人生も、そんな旅の創造に、お手伝いに力を注げればと考えるような年齢となりました。

最近では、60 年代から 70 年代に流行った、というより昭和の歌にややウルが来て、義を頑なに守るいい男と、気丈に耐えるいい女を描いた小説にウルウルと来て、傍若無人なワカモノに血管が膨れる毎日を送っています。個人的にキワメテキケンな兆候です。

そこで同病相憐れむ同窓の諸君！特に 2-2、3-1 の皆さん、同窓会を開いて大いに歌い、泣き（？）、怒り（？）、

いや楽しく語らしましょう！！

(因みに私のPCメールアドレスは
hiroif6.dion.ne.jpです)。

何と言ってもお互い50年を超える人生、ネタはつき
ないはずですよね…。ではその日を楽しみに。

「タンザニアより生きて還りました」

3-9 松田千尋

ご無沙汰しています旧3年9組の松田です。平成8年に明石高校の食堂で行われました同窓会に出席以来、都合がつかずに同窓会にはご無沙汰です。尤も地元の数人から十数人の方々とは比較的頻繁にお会いしていますので、ご無沙汰という実感はありません。以前、河合君からの依頼で原稿を書いてから数年ですが、今回はあつかましくも自ら投稿させていただきます。内容は交叉点メーリングリストに投稿しましたものを一部修正したものです。

さて、事の起こりは3年半前の平成16年1月でした。あまり体を動かさない職業でもあり、30歳を過ぎてからじわじわと無駄肉がつき、173センチの身長に77キロ、ウエストも92センチと完全なメタボリックシンドロームと成り果てていました。その頃です。仕事のストレスもあったのか、ある日突然目眩がしました。最初は貧血かと思いましたが、落ち着いてから血圧を測定するとなんと180もあります。目眩の瞬間には200を超えていただろうと思います。血圧には自信がありましたので大変ショックでした。しばらくは、同じ24回生の山西君のお世話で降圧剤を服用していたのですが、なんとか体質改善をしなければと切実に思いました。それで、有酸素運動を始めることを決めました。ただ、多くの方が挫折されますように、持続させるには意思力もさることながらそれを支える大きなモチベーションが必要です。

それで思い出したのが、キリマンジャロです。32年前、子供時代からずっと登りたかったキリマンジャロ山に挑戦したのですが、5300メートル付近で呼吸困難になりリタイアしました。そして今を去ること6年半前、平成12年の暮れに嫌がる家内と息子をケニアのアンボセリ国立公園に引っ張って行き、雪を頂いて聳えるキリマンジャロを仰ぎ見た時、まさかその5年後に再びこの地を訪れることになろうとは思いませんでした。

さて登ろうと決心したものの、全くメドは立ちませんでした。21歳でだめだったのに、51歳(当時)のおっさんに可能なのだろうかと何度も思いましたが、決心してトレーニングを開始しました。トレーニング内容は上の目的のごとく、大蔵海岸にできたジムのトレッドミルでハツカネズミのように走ることでした。約1年で10キロメートルを完走できるようになり、血圧も上が130台、下が60台になり体重も21歳当時までは無理ですが、66キロになりました。その他、6000メートルにより馴化するために低酸素室で5回ほど訓

練を受けました。旅行会社の簡単な装置で4500メートルぐらいの高度を体験できます。

そしていよいよ出発ですが、平成17年8月5日の夕刻伊丹から羽田まで行き、成田発6日10時フライトでアムステルダム経由ナイロビ到着が7日の午前5時でした。リムジンで陸路国境を越えてキリマンジャロの麓の街モシに着いたのは15時、時差があるので、成田から35時間後でした。36℃の灼熱地獄だった日本から15度のナイロビ(海拔1700メートル)への変化がありますので、兎に角風邪をひかないように注意しました。アムステルダムまでは実質的に日本でしたが、そこからナイロビまでは日本人はおろか東洋人すらいません。留守を最小にする日程のツアーがなく、全くの単独旅行となりました。

さていよいよ8月8日から登山が始まりました。初日は海拔1800メートルのマングゲートから2720メートルのマングラハットまで、およそ4時間の行程です。余裕で午後2時に到着します。ポーターが3人、コックが1人、ガイドが1人です。私はカメラとテルモスと昼食などを持って登ります。だらだらとした道です。

小屋に到着して荷物を置きますと、ポーターの1人が洗面器に熱いお湯を持ってきてくれます。それで顔と手を洗ってさっぱりし、食堂でコーヒーやココアをたくさん飲みます。高山病予防のため、1日4リットルの水分をとります。小屋の居住環境は日本のそれとは比べ物になりません。1人1畳が確保され、それぞれ独立しています。白馬山荘のVIPルーム並です。トイレも水洗です。中村君に取り寄せてもらったパルスオキシメーターで血液の酸素飽和度を測定しましたが、99パーセント、大丈夫です。でも高度の影響を受けて少し風邪のような症状になります。ローヤルゼリーを飲み、プロポリスで喉の炎症を和らげ、抗生物質を飲みます。実際プロポリスのおかげで喉がなんとか持ちました。

そのうちに日が暮れてディナータイムです。スープから始まり、野菜を中心とした料理が出て、パンとコーヒー、ココア、デザートと続きます。西洋人を標準にしていますので、私にはとても食べきれないボリュームです。そして10時間に及ぶ長い夜が来ます。高山病予防の特効薬であるダイアモックスを服用していますので、夜中に何度もトイレに目を覚ましながらか朝になりました。ガイドのモーニングコールと洗面器のお湯、あとティータイム、朝食そして出発です。

約5時間で海拔3720メートルのホロンボハットに到着しました。さすがに3500メートル付近で呼吸が少し苦しくなりました。スケジュールはマングラハットと同じです。勿論トイレは水洗です。パルスオキシメーターで酸素飽和度を測定すると99パーセントです。小屋で同室したドイツ人たちのも測定してあげました。その中で一人20代の女性の数値が78パーセントです。一般にホロンボハットで80パーセントを切ると厳しいそうです。そんなことは言えませんが、「ブリーズ、

モア ディープリー」といって深呼吸を何度もさせてようやく 90 パーセントまで持っていきました。『ユーアー オーケー』といっただけです。彼女もほっとしていました。本当はきびしいなと思いましたがそんなことは言えません。彼女は 5000 メートルぐらいでリタイアしたようですが、この時希望を持たせてあげてよかったと思っています。



さて 3 日目は高度馴化のためにホロンボハット滞在です。ランチボックスを持って、海拔 4300 メートルぐらいまで登ってお昼ごろに戻ってきました。一般の登山客はこの日もう一つ上の小屋まで登りますが、私はここで 1 日余分に滞在しました。

4 日目は 4702 メートルのキボハットまで登ります。高度馴化がうまくいったのでしょうか、ここは快調でした。通常 6 時間かかるところを 4 時間半で登りました。お昼には到着しましたが、ここですぐ休むと高山病になります。高山では少しでも高く上ってから、降りて来たところで睡眠をとるのが理想です。そこで、今晚夜中から登る最後の登りをちょっと予行演習しようと思い、昼食後ガイドが小屋にはいった隙を見て登りはじめました。なんの危険もありません。最後の登りのおよそ 3 分の 1 にあたる海拔 5000 メートルまで登って、水をたっぷり飲んで降りてきました。案の定ガイドに見つかりました。心配そうに見ていましたので平謝りしました。でもおかげさまで夕食もたらふく食べ、ぐっすりと眠りました。実際周りでは戻している人がいましたから、順調でした。

さて夜中の 11 時に起こされて、簡単な食事を摂って出発です。順調に高度を稼ぎました。長距離走なみの呼吸をして、1 歩が靴の長さぐらいです。そんなゆっくりした歩みなのになぜか私とガイドが先頭になってしまいました。50 歳を過ぎたおっさんが 20 代 30 代より速く登れるのかなあと思いましたが現実でした。よく見るとスピードは変わらないのですが、他の登山者は 20 分ごとに 5 分ぐらい休憩しています。私は休憩後の歩き始めがしんどいので、1 時間ぐらいは休憩しませんでした。その違いだったようです。

こんな調子で海拔 5600 メートルまでは全く問題なく登ってきましたが、ここに来て突然呼吸が困難になりました。パルスオキシメーターで測定しませんでした。恐らく 70 パーセントぐらいになっていたでしょう。病院ならば集中治療室に入れられる状態だったかもしれません。ここから頂上台地であるギルマンスポイント 5681 メートルまで 1 時間かかり、終にカナダ人の女の子に追い越されました。それでも標準タイムより早く到着し、ギルマンスポイントでは午前 5 時、まだ真っ暗でした。そこから最高点のウフルピーク 5895 メートルまでは悲惨でした。特に最後の高度差 100 メートル

は 10 歩歩いて（1 歩は靴の幅です）30 回ぐらい深呼吸するといったありさまでした。ここで気圧は 470 ヘクトパスカルぐらいですから平地の半分以下です。結局 2 時間 15 分かかって、頂上到着は 7 時 15 分でした。もしキリマンジャロがあと 100 メートル高い 6000 メートルだったら、またもや頂上を目の前にして引き返さざるを得なかったでしょう。自分の体力に自信をもてたと同時に、限界をも思い知らされました。これを私の最高到達点と考え、後は高さにこだわらない余裕をもった登山をしようと思います。

これが今回のあらましですが、ガイドを始め本当に人に恵まれました。ガイドは 46 歳の人で、6 日間お互いの国のこと、それぞれの仕事のこと、家族のこと、勿論ツアーのスケジュールのこと、タンザニアの国立公園のこと、宗教のこと、今困っていることなどを話し合うことができました。

タンザニアはスワヒリ語が使えれば大変精神的に楽しい旅行になります。ほんの片言ですが、できるだけ使うようにしました。例えばトイレのことをスワヒリ語では「チョー」と言います。これは日本語では蝶々のことだと教えると、大変受けました。ホロンボハットで有名になってしまい、たくさんいる他のガイドが、「オー マツダ ハバリ ヤ アスブヒ（お早う）パタフライ」と声をかけてくれました。麓のホテルの女の子も大変気立ての良い子たちでした。20 歳までの娘達だと思いますが、ディナーの準備の最中にお互い名前を呼び合っていますので、誰がどの名前かを知って、朝に「ステラ ハバリ ヤ アスブヒ」などと挨拶したらとても喜んでくれました。

帰りはひやひやものでした。モシからナイロビに戻るバスを間違えてしまい、気がついたのはナイロビに戻ってからでした。そして積み込んだはずの荷物が出てきません。後 1 分でバスが別の所に移動するという土壇場で見つかりました。予定より 2 時間遅れでナイロビの町に到着しましたが、フライトの 2 時間前、すでに午後 6 時半真っ暗でした。運良く迎えに来てくれていた現地旅行社の係員が、「よく戻ってこれましたね。」と言っていました。今回は本当にたくさんの幸運とたくさんの人達のお陰で目的を達成できました。本自分一人では本当になにもできないとしみじみ思いました。

今回の登頂記ではいかにも希望に満ちて意気揚々と出かけたように思われるかもしれませんが、実は違いました。何とも言えない寂寥感がこころばかりありました。自ら命を絶とうとまで思いはしませんが、もし何かが起こって自分の人生が終わってもそれは運命なのだろうと受け容れるような心境でした。それで真っ暗なナイロビの街で置き去りにされそうになっても、変に落ち着いていたのかもしれない。タイトルを「タンザニアより生きて還りました」としましたのは、それがあったからです。

それから 2 年経ちました。その間にはたくさんの出会いがありました。また、キリマンジャロに出かける

直前に行われましたミニ同窓会にて松浦君に 35 年振りで会い、彼の勧めもあり、20 年ぶりにフルートの練習を再開して 2 年になります。登山という目的はなくなりましたが、ランニングは相変わらず継続しています。仕事が終わってから、約 11 キロから多い日で 13 キロをハツカネズミします。そして家に帰って約 1 時間フルートの練習です。夕食を食べて犬を散歩させればもう午後 11 時です。いつの間にか寂寥感はなくなりました。今現在体重は 65 キロ、ウェスト 74 センチと 20 代の体形を維持しています。頭は年齢相応にキリマンジャロ（スワヒリ語で輝く山）になりつつありますが。目指せ、由美かおる。そしてプロゴルファーの古市さんではありませんが、たくさんの人達に「ありがとう」と言いたい心境です。

『「汝自身を知れ」この平易で難解な言葉』

3-10 大西和彦

ギリシャ神話に起源し、ソクラテスによって世に知られた言葉であるが、年齢を重ねるごとに解釈が変わっていく。当初は「無知の知」とセットで覚えたこともあり、言葉のとおり汝を「内なる自分」と単純に解釈していたのであるが、「自分の知らない自分自身のパワー」とも解釈できるのではないかと。

仏教では如来、イスラムではアラー、キリスト教ではゴッド、などと呼ばれているが究極は素粒子によってもたらされるエネルギーの発現形態であり、おそらく同じ物を世界中のあらゆる人が体験していると思われる。

それは各自自分の中にある。思いによって生ずる素粒子的なエネルギーの素の成長した結果もたらされるパワーによる現象であり、ある人は奇跡と呼ぶかも知れないが決して奇跡ではなく起こるべくして起きる現象である。

こんなことを言っていると「こいつおかしくなったんちゃうか」と言われそうだが。人の「思い」は重要なことで、特に四季に育まれた日本人ならではの特徴的な思いとして万物を敬うアニミズム的な素晴らしい「思い」がある。

昨今の殺伐とした事件の増加はこの「思い」の衰退に起因しているのではと感じるのは私だけか。野の草花に哀れみを感じられる感性を持っている人間は人間としての最低の倫理も守れないような事件を起こさない。家庭で、あるいは教育の場に日本人としての感性を取り戻す仕掛けがさなければ日本の未来は暗い。

アメリカの陰謀や中国や韓国のずるがしこさに振り回されず、プリミティブな日本人の再現を計る必要があるのではないかと。

では、具体的にどのように回帰させるのか。

とおりにっぺんの答えではあるが、教育に帰結すると思う。長いスパンで考えた場合、教育から家庭へ地域へというサイクルが考えられる。また、家庭は外部からコントロールできないが、教育は国や行政からあ

る程度コントロールが可能だからである。

戦後、アメリカの戦略で教育制度からまず日本人を変えようとしたのは今から考えると、目的を達成したのではと思われる。逆に今度は教育からスタートして、プリミティブな日本人に回帰するプログラムを国を挙げて実施する時期に来たのではないかと。

まだ、十分に間に合う。最近ベストセラーになった本を見ても判るように国民の本質は西洋的な物質主体の価値ではなく、東洋的な精神主体の部分に価値を求めているのである。

昨年機会があって、上海に行ってきましたが、まさに感じたのは東洋的な精神文化が、西洋の物質主体の文化によって侵されていくさまであった。

以下に上海レポートとして其のときに感じたことを記載します。

Shang Hai REPORT

ver 2.0 2005.1.28-31

「温故知新」その先に見えるもの

我々が上海で見てきたもの、中国の首脳陣が見ようとしているもの、中国の庶民が見たいもの、そして世界の人々が見てほしいものについての一考察。

上海の第一印象は「ガスっぽい街」である。特に夜景に煙るガスが印象的である。俗に言われるエネルギー感もあるが冒頭のイメージが勝る。



ただ、目標を決めてみんなが同じ方向にガムシャラに突き進む姿は今日、ライフスタイルの多様化した日本には無くなった姿であり、懐かしい気さえする。日本の戦後復興時代、あるいは高度成長時代の姿に近いのかも知れない。「明」の表通り、「暗」の裏通りの極端な

コントラストが貧富の差を物語っている。

上海の魅力、それは 1930 年代のヨーロッパ風建物が完全な形で残っている事。これだけまとまって保存されている街並は残念ながら日本にはない。その中に立つとなんとなくノスタルジックな気分になることができる。私の中ではなぜか子供の時に見た戦争映画の 1 シーンと重なりあっている。レンガの持つイメージが我々の世代にとっては軍事倉庫をほうふつとさせるからか。

夜の上海を歩いていると、ハード面においてもそうだがソフト面においても急激に変わりつつあるのが伺える。儒教の教えと、文明の進歩はトレードオフな関係にあるのかも知れない。公園のあちこちで若者が人目もはばからず愛を確かめ合う姿は儒教文化の国とは思えない状況である。

急激な文明化のスピードにソフト面の対応が出来なかったのであろう。わが国の在りし日の姿を垣間見る様でもある。また、気がつくのは独特の色使いというか感性を疑うようなライトアップの色である。もし、聞けるのならば其の心が知りたい。

かの鄧小平氏の目に見えていた色だろうか？それとも神のお告げか？

周荘には上海と異なった中国の顔があった。文明の進歩に同ぜずに独自の水郷の村を先人の知恵で持って守ってきたのであろう。だが、残念ながら観光資源として現代中国首脳陣は其の本質を見誤ってしまった。ついに得意の ROLAX 戦略を遺跡に適用してしまったのである。

RC で遺跡をコピーしてもた。すごい。 あほか！

四千年の歴史を連続した百年で切り取った「上海」。五百年の点でワープさせた「周荘」。

どちらもスケールは大きい。人々は国がどちらを向いていようが自分の「OK牧場」を見ている、今も、昔も。

しかし、国家は外を見ている、いや、気にしているのだ。本来の自国の強みは何なのか？

「温故知新」の教えはどうしたのだ。世界一を目指し近代化を進め其の先に見えているのは世界のニューリーダーとしての中国だろうか？ 案外、欧米諸国の物質文明の行き詰まりの二の舞ではないのか。4 千年を誇る東洋哲学の世界を欧米が注目し始めてきた本質に気づいているのだろうか？

とにかく、当分は走り続けそう。ガムシャラに

「イー、アル、サン、スー、上海！！！」

注記)・ROLAX: 偽物コピーのこと・RC: 鉄筋コンクリート

「病院時間後遺症」

3-8 白国(美馬)優子

先日、入院しました。以前から痛めていた左膝の中を掃除するための入院でした。いつも私は医療スタッフ側であるため、初めて患者さん側から病院を眺めるにはよい機会でした。手術といっても炎症を起こしている滑膜を除去するのみでしたので、入退院日を含めて5日間という短い期間でした。

さてさて患者の立場でいろいろ言わせていただくこととしましょう。入院経験のある方は少なからず同感していただける事もあるのではないかと思います。自分で車を運転して、病院までは快適だったのですが、駐車場から受付までの荷物を運ぶのは大変です。痛い膝を引きずりながら荷物を運び込み、受付を済ますと、一階で血圧を自己測定させられ、三階の病室に着くや否やまた血圧を測られました。一階から三階までの移動でそんなに変わっているはずはないのに。翌日が手術なので、昼食以後は絶食をさせられます。コーヒーが飲めなくて、中毒の私はガンガンと頭痛がしてきます。「仕方ない、明日が手術だから。ゆっくり本でも読

もうかな。」とっていると同室の患者さんが話しかけてこられます、とってもフレンドリー。でも、トイレの使い方を失敗し水浸しにした途端に冷ややかな眼に変わり、雰囲気改善にはかなりの努力が必要だったのです。ちなみに、病室は患者間のもめ事ランキング一位を生み出すステージなのです。それでも、翌日の手術の間には、押並べてエールを送ってくれます。

私の手術は土曜日の最後でした。スタッフ達は手術終了後凄いスピードで片付け始めます。「早く帰りたいのはわかる、わかるけど、私はずーと頭痛がしてるの！ストレッチャーをそんなに早く動かさないで！」と叫ぶ前に胆汁を吐きました。ともあれ、下半身麻酔の半減期は6時間のはずだから、切れるまで8時間以上はかかるはず。と、わかってはいるがなんだか不安なんです。このままだったらどうしよう。腰は痛いし。とは言いながらも理論通りに麻酔は切れ、私は熟睡しましたが、看護師さんと同室の患者さん達は朝までずーと気にして見ていてくださったようです。

手術翌日からおしっこの管が抜けるまではトイレにも行かなくていいし、食事も運んでくれるし、持ち込んだ本は全部読めたし、癖になりそうなくらい快適でした。私は仕事の際、病棟で常に気にしていたことがあります。私達が立ってベッド上の患者さんに話しかけるとい位置関係です。私は膝を悪くしてからベッドサイドに屈んで患者さんと話せないの、常にベッドを見下ろす形で病棟活動しています。今回の入院で、自分がベッド上からスタッフを見上げてみたとき、威圧感を感じるよりむしろ安心感があったのは以外でした。それよりも、私がいやだったのは私の身体の痛みを医師、看護師達が評価することでした。私もこれから、他人の痛みは所詮理解できないと肝に銘じて患者さんと接しようと思います。もちろん患者インタビューからの痛み評価は必要です。しかし、その評価を患者にフィードバックしてもらわなくてもいいと思いませんか？ゴチャゴチャ言っていないで不都合症状を改善して～です。

ところで、退院後も軟骨のなくなった私の膝はゴリゴリと音をたてています。また、夕方6時になるとお腹が空き、夜10時になると眠くなります。この“病院時間後遺症”はいつまで続くのでしょうか。

「新しい仕事」

3-9 田辺秋比古

1. 新しい仕事

人に会って話をするというのは、意外と面白い。新たに始めた今の仕事で最も必要とされるのはコミュニケーション力である。

つまり複数人間が社会生活を行う上でお互いがお互いの意思の伝達を行うために欠かすことができない力だからである。

この人は本当に何が言いたいのか？

相手が発する言葉だけではなく微妙な目の動き、言

葉の間の取り方など一挙一動に注意を注ぐ。そしてこちらの意思をどう伝えるか？意思の一方通行にならないようにと表現を変えて相手の意思の確認をしたりし、そのキャッチボール繰り返し続けていくといつか探していたものを見つけだし問題点を共有することが出来る時がある。

2. 話した人

男は酒を飲まないと言わないものだが、女性はその点常に本音で話をしてくれる。話した相手は、ブティックや料理店の経営、アパレル販売 介護関係など自分自身手に職を持っている女性がほとんどだが、もちろん一般主婦もいて年齢も30歳前半から70過ぎの人など多種多様である。

こういう女性たちと話しをすることにより、思わず「ああ そういうことだったのか！」と今になって理解できることが多くある。

3. 離婚の分類

外に出て働かざるを得ないとわけではないが先に述べた女性の多くは離婚経験者である。

女性側の言い分だけを聞いているので必ずしも公平とは言えないが、男性のほうがどうもぶが悪いように感じられる。

離婚の原因は十人十色だが、大別すると

1. 男性が借金、博打など金銭上のトラブルを作った場合、

2. 夫婦で共同事業をしていたり、共稼ぎの場合に家庭内での立場についてそれぞれの思いと実体の開きが大きくなってしまった場合

3. 「えっ なんで・・・？」と眩きくなるような男からすれば原因が思い当たらない場合

4. それぞれの姿

1 番目は容易に想像がつくと思うが、単なる金銭問題だけなら女性は昼間にはプレス作業のパート、夜はスナックと身を粉にして返済をする。いつか旦那は立ち直ってくれるだろうと思いつつ。しかし旦那は奥さんが返済している最中でもまた借金を重ね最後に「もう面倒みきれんわ。」と愛想をつかさ離婚に至るのがほとんどと言える。

2 番目は同じ仕事をしている間は良き同僚であったが、結婚したら女性に仕事場では良き同僚で家庭では良き妻であることを望みすぎた？場合。

共稼ぎにもかかわらず家事全般を妻に当たり前のごとく求め女性がそれに耐え切れず「私だって働いているのよ！」と離婚へとつながった場合

問題なのは3つめ、

さきの2つは仮に中高年で離婚しても単なる離婚であり、長い年月を経て修復できないほど亀裂が十分に広がった離婚を熟年離婚といえるのでは。

その原因として、渡辺淳一はその著書「後の祭り」で夫婦の体力差と夫の濡れ落ち葉化と述べているが（私などは離婚した後でよんだのでまさに題名どおりになったが）、これらに周囲の人達と意思の疎通が出来ない男の孤立化も加えることが出来るのではないだろ

うか。

5. 分かったこと

映画では高倉健、テレビでは寺内貫太郎を見て育った年代だからあながちはずれてはいないと思う。

（ただ女性すべてが賠償千恵子や加藤治子なわけではないのを肝に銘ずるべきだったが）

「飯、風呂、寝る」などと言えればわれわれより上の世代の男のこととおもっていたが、実際1人暮らしになって分かったのは、仕事を終え帰宅後自分で自分1人の食事を作ることさえ非常に大きな負担であるということである。（まして家族全員の分は）

女性として外で仕事をして帰れば先の男の言い分のように振る舞いたいと思ってもそれは自然のこととも言える。（恋愛時代の彼女の手作り弁当を今でも味わえる人は幸いである。）

森 進一と大原麗子の離婚の際出た言葉の「家庭に男は2人要らない」という本当の意味が今頃になってようやく理解できた。

6. 勘違い

また、男は家族と対話をしなくても理解し合っているなぜならわれわれは家族であり男は家族のため一生懸命働いているそれで十分じゃないか。働いている男の背中を見れば言わなくても分かるだろうという単純な思い込みをしていなかったか？

それと勘違いをしてはいけないのは、物分りがいい優しい父や家事を手伝う良い夫を演ずることで家族とのコミュニケーションがとれていると思いついては大きな間違いである。

分かった顔で彼女達の話に頷きながら通り一遍等の会話をし、一見対話しているように見えてもそこには心の交流は見られない。それは決して彼女達の真意を理解しそして自分自身の思いを彼女達が理解したということではなく全く意思の疎通が行われていないからだ。

以前、娘から

「いい父親なんか必要ない。なんでひとの言うことが理解できへんの！」と言われたことがあった。いい父親よりもっと生身の人間として向き合ってもらいたかったのかと、今頃になって娘の気持ちが少し理解できたような気がするのだが。

7. 亀裂ができるとき

私が話した女性に限らず、母親がそうであったように女性というのは最後の最後まで我慢をし続けるようだ。そしてその限界が来たとき、つまり男がそれを知ったときには修復不可能までに亀裂が大きくなっている。

結婚すれば自然に男は家庭では夫になり女は妻になると勝手に思い込みがちだが、

実は

男は言わなくても理解し合える。

女は言っても無駄。

この意識の行き違いに気づかない限りそのうちさっ

きの亀裂が入る。

ピシッと男には聞こえない静かな音で。

余談だが介護センターをしている知人から聞いた

8. 実際にあった話

ご主人は現在 62 歳

某一流商社の営業部長を最後に定年退職し現在無職である。現役当時はごたぶんに漏れず猛烈かつ典型的な会社人間であったらしい。

その奥さんから悩みの相談があった

「最近、主人の挙動がおかしい？」と

調べたところ、毎朝、背広にネクタイを締め外出。そして、近所の公園に行き数時間ずっとベンチに座り、お昼になるとコンビニでおにぎりを買いもとのベンチで食事、そしてまたそこに座り続ける。

夕方になると駅前の飲み屋の前に立ち、中に入りもせずにじっと看板を見続ける。

その結果に驚いた奥さんは、早速病院に連れて行き診断を受けた結果、病状は若年性アルツハイマー。

ここで思い出すのは渡辺 謙と樋口可南子主演の「明日の記憶」だが、この奥さんの出した結果は、「そんな男に未練はない！早速離婚手続きを。」であった。現在ご主人は知人のホームで 1 人暮らしている。

「子午線標識について」

3-1 和澤（佐伯）洋子

母校、県立明石高等学校に歴史に残る貴重な場所があることをご存知ですか。今回はこの“貴重な場所”に関するお話です。

わが町明石市が、『子午線の街』として知られているのは良くご存知でしょう。



2007 年 3 月、日本標準時子午線関係資料 5 点（大日本中央標準時子午線通過地識標・子午線標示柱・神明国道子午線標識・子午儀（1928 年の天測で使用）・子午儀（1951 年の天測で使用））が 明石市有形文化財に指定されました。

どうして明石市が『子午線の街』となったのか、その歴史は 110 年以上前にさかのぼります。

1884 年（明治 17）に世界標準時について国際会議がアメリカのワシントンで開かれ、イギリスのグリニッジ天文台を通る子午線が経度 0 度と定められました。1886 年、9 時間の時差を持つ東経 135 度子午線が日本標準時として制定され、1888 年 1 月 1 日から施行されました。偶然にも東経 135 度子午線は明石を通過しています。子午線が明石を通過することの意味を人々に知らせることを強く願った明石の先人たちの想いにより、1910 年（明治 43）に日本最初の子午線標識が大日本帝國陸地測量部の地図に基づいて建設されました。

その後、1928（昭和 3）年、子午線標識を正確な位置に建て替える運動が occurred。測量を依頼された京都大学地球物理学教室の野満隆治博士は、天体測量に基づく天文経度に標識を建てるべきと考え、明石中学校（現在の明石高等学校）で天体観測を行いました。観測の結果、石の標識は 103メートル西に寄っていることが分かり、石の標識を相生町巡査駐在所前に移動させるとともに昭和 5 年、月照寺の正面に新しい子午線標識を建てられ、天文科学館の建設へとつながっています。

学校の校庭には観測した場所にコンクリートの台が残っています。残念ながらこのことを知っているものは少なく、昨年 2 回学校へ出かけ、事務室や生徒にも尋ねてみましたが知りませんでした。たぶん先生方も知らないかもしれません。実は私も仕事にかかわらなければ知らないままでした。

学校に出かけた際にはぜひ、一度探してみてください。

『「不二家騒動」に思う』

3-8 濱谷透

同期の皆さんお変わりありませんか。

来年の明高 24 回生同期会の代表幹事に指名されています濱谷です。

この 3 年数ヶ月「まだ先だ」と、思っていたのが、もう 1 年を切ってきました。そろそろ準備にかからなくてはと次第に焦ってきている自分がいます。まずは手伝ってくれる仲間を募らなければならないのですが、前回の時に数人指名させてもらった方のリストが分らなくなり、どうも最初からやり直しようと考えています。当初は余裕をもって、もっと早くに準備にかかるつもりだったのが、記憶に新しい「不二家騒動」の影響で遅れたのです。ご存知の方も多かもしれませんが、私は洋菓子の不二家のフランチャイズ店（西明石店）を営んでいます。同時に関西百数十店の代表でもあります。そんな訳で 1 月 10 日からというもの何度も東京へ出向き会社幹部と会議や交渉、また全国の FC 店の意見集約など、非常に忙しく、心労も激しい（自分で言うのも何ですが…）日々を送っています。2 ヶ月半ほど休業し、現在営業をしていますが、影響はなかなか厳しいものがあります。

ところで「不二家騒動」とは、何だと思われませんか、今では一部の週刊誌以外取り上げられることも無くなってきたのですが、関係者の一人として、また最大の被害者である販売店の立場で言わせていただくなら、まさにマスコミが造った「事件」であったように思います。もちろんマスコミの故意とは言わないまでも（みのもんたの「朝、ズバ！」は別です。非常に悪意に満ちた「捏造」であり、我々も TBS とみのもんたを提訴するよう不二家に要請しています）。

たしかに不二家のマスコミ対応のお粗末さは言うま

でもないことですが、「消費期限切れ牛乳使用」については、「法令違反」も「隠蔽」もなかった。まして「健康被害」を出していない事件でありながら、なぜ、激しい「バッシング」を受けたのか。

各マスコミが読者受け、視聴者受けを狙った結果であるように思われます。その上、新聞の担当記者やテレビのコメンテーターが食品衛生についての知識や法令に無知であったことが、騒ぎを大きくした。それに輪をかけたような「農水省」「厚労省」のはしやぎようがあった。実際「事務所費問題」の松岡農水相、「生む機械」の柳沢厚労相が変にやる気になったと言う報道もあった。所管の「保健所」はいい迷惑だったようです。

普段、このような「事件」があれば、たよるのは新聞、テレビなのですが、実際その中に身を置くと、社会の理不尽さが見えてくるものです。創業百年の老舗でもマスコミ対応を間違えると倒産の危機に陥るといことが、良く分かりました。同時に今回のことで廃業（ショッピングセンターなどに入っている店舗で退店を強制された店舗が数多くあった）したお店も少なくなかった。もちろん不二家が悪いと言ってしまえばそれまでだが、マスコミ関係者は記事の書き様、話題の取り上げようによって、多くの真面目に暮らしている人間が窮地に追い込まれていくことを肝に銘じなければならない。

事務局からのお願い

住所不明者についてのおお願い

2007年4月現在（敬称略）

1組：島崎雅和 村瀬繁樹 八木義孝 山際健司
関 みわ 泉谷恵子 2組：安藤悦郎 竹村郁子 3組：北田雅福 高橋英樹 土島日出彦 藤永みどり 秋定和子 4組：奥野好隆 田村政一 5組：大村直樹 武内規 長谷川俊広 山本和彦 平山登志子 中川ゆかり 6組：西馬慎三 水池亮一 加藤明江 才純子 7組：辻敏明 近藤恵子 富岡のみ 森江真岐子 盛井雅子 8組：諸岡宗司 山崎清孝 9組：岸明彦 加藤和宏 三浪晴生 10組：網谷興三 久山哲広 山崎栄造 高田和昭 村上正彦

もし心当たりがございましたら、下記連絡先までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

名簿の管理は、手作業で行っております。ミスがありましたら、ご連絡ください。

河合昭彦

〒674-0051 明石市大久保町大窪 1000-1

Tel&Fax:078-934-1667 E-mail:master@kawais.com

カンパのおお願い

有志のご寄付で発行、郵送料金をまかなってまいりました「kosaten24」ですが、残金がとぼしくなりました。

ネットのみでの回覧、ということも考えましたが出来る限りは従来の形でお届けしたいと思い、カンパをお願いすることとなりました。必要経費のほとんどは郵送費で、1回の発行に33,000円ほどかかります。印刷や編集は手弁当です。

1口2,000円をお願いできればと考えております。

同封の郵便為替にて振り込んでいただければ幸いです（00930-3-241197 中村守 名義）。

何卒、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

M()m

詳細は上記の河合までお問い合わせください。

日付	項目	入金	出金	残高
2003/8/9	寄付	¥11,420		¥24,700
	寄付(会費として)	¥98,400		¥123,100
2004/7/2	送料		¥31,290	¥91,810
2005/5/1	封筒		¥1,431	¥90,379
2005/6/7	送料		¥30,240	¥60,139
2005/6/18	送料		¥980	¥59,159
2005/7/2	寄付	¥8,250		¥67,409
2006/1/20	寄付	¥10,000		¥77,409
2006/4/19	封筒		¥1,908	¥75,501
2006/6/19	送料		¥30,800	¥44,701

編集後記

松田千尋

今回から交叉点の編集を担当させていただくことになりました松田です。交叉点が始まってから15年ぐらいたが経過しています。今回編集に先立って、過去の記事を読み返して見ました。当然のことですが、内容が少しずつ重厚になってきているなあと実感します。

ご無理をいって原稿を書いていた皆様、本当に有難うございます。おかげさまでたくさんの方の原稿を戴くことができました。これからもたくさんの方々の方々に原稿をお願いしたいのですが、これまでですべての方に原稿依頼ができていないのが現状です。依頼があれば投稿しようと思っていたら、結構たくさんいらっしゃるに違いありません。最初に3年10組の男子クラスからの出発でしたので、どうしても投稿者に偏りがでてしまっています。そこで、今度の同窓会では原稿を依頼していただく方を数名お願いさせていただくかもしれません。その時は快くお引き受けいただきますよう、切にお願いします。どうしても原稿を集める方が複数必要だと思います。

さて、編集を引き受けたといっても、私一人ではできません。幸い中村君に引き続き編集作業のお手伝いをしていただけるようです。といっても実態は私がお手伝いするというのが正しいのかもしれませんが、1年でも長く「交叉点」を継続してゆきたいですから、今後もご協力いただきますようお願い申し上げます。